

## 『古事記』における「ヤマトタケル物語」の構造

### はじめに

関 丙 勳

ヤマトタケルノミコトの話は『古事記』の中巻に位置しながら、神代神話と比べても遜色のない濃厚な文芸性を有している。それらの文芸性は古代から現在に至るまで、いろんな形で享受され、また、新しい文芸作品を生み出してきた。

『古事記』において、二度に亘るヤマトタケルの征討の話の内、東国征伐譚は「境界地に蟠踞する荒ぶる神」の平定に焦点を当てており、西国征伐譚は、「服従しない人」を制圧することに主眼点が置かれている。もちろん、クマソタケルを征伐して帰ってくる途中、山の神や川の神、海峡の神などを服従させたことが記されているが、そこに具体的な物語が形成されているとはいえない。一方の東国征伐譚では、相武国において、自分を騙した国造を斬って火に焼いて滅ぼしたとする個所を除けば、だいたい境界地にすむ神を殺す話を中心をなしている。それは、西国の平定と国境の定めが、東国のそれより進んでいたことを窺わせるもので、その分、クマソタケルやイヅモタケルなど、名を付けた人物を登場させることができたのであろう。

本稿では、『古事記』の景行記におけるヤマトタケルの西国征伐譚を中心に、父の景行天皇及び兄のオホウスとの関係や、征伐を通じて確認されるヤマトタケル物語の重層的な構造に注目し、その根底にあるものは何か探ってみたい。

その一面には、乱行を繰り返して高天原から出雲へと追放されるスサノヲの面影を残しているが、そこには、

支配者にはなれない、征討者としての宿命が暗示されている。

## 一 ヤマトタケル物語の深層

『古事記』のヤマトタケルには、凶暴な性格とともに、その裏面には柔弱な姿が共存している。彼は刻々に変身ぶりを見せており、それはまるで、数人の役割が一人を通して表出されているような叙述方式である。

まず、彼の凶暴性に内在しているものは何か追究してみたい。ヤマトタケルと呼ばれる前の呼称のヲウスがクマソタケルの征伐を命令される過程を記すところに、その粗暴ともいえる性情が露わになっている。兄のオホウスが、父帝が妃にしようとした女性を横取りし、朝夕の食卓に出なかつたことから、兄を教え諭せ、との命令が下される。そこでヲウスは、兄の四肢を裂いて残虐に殺すのである。そこにヲウスの野蛮な性格が浮き彫りになっているのである。

「如何かねぎつる」とのりたまひき。答へて白さく、「朝曙に廁に入りし時、待ち捕へて搦み批ぎて、其の枝を引き闕きて、薦に裏みて投げ棄てつ」とまをしき。是に天皇、その御子の建く荒き情を惶みて詔りたまはく、「西の方に熊曾建二人有り。是れ伏はず礼无き人等なり。故、其の人等を取れ」とのりたまひて遣はしき。<sup>(1)</sup>

ヲウスは、オホウスが朝早く廁にいく時を待つて、捉えて四肢を引き裂いて捨てたと天皇に奏上している。そこで父帝は、兄を殺したヲウスの横暴な性情を恐れ、西国征伐を命じたと記している。この記事は、ヲウスの乱暴な行為を前面に出しているが、その深層には、罪を犯した者への、処刑を行う者としての側面と、もう一方では、征討者として派遣するためのこじつけがあるようにも思われる。

『鑑賞日本古典文学』は、『日本書紀』がオホウスとヲウスを双生児と記しているところに注目し、双生児は凶と見なされ、片方が殺害され、捨てられる風習があつたことを指摘している。<sup>(2)</sup> すなわち、弟の手に殺される兄の

エネルギーは弟に結集され、より強靱な力を発揮するようになる構造であるということである。たとえば、クマソタケルを征伐することによって、ヲウスがヤマトタケルという呼称を与えられてさらに強くなるように、双子の兄の死は、すなわち、弟の力を倍加させる原動力になることであろう。長谷川氏も、西国征伐を通して殺されるクマソタケルやイズモタケルと、ヤマトタケルの両者は神話的に見ると、分身の関係で、クマソタケルやイズモタケルがヤマトタケルへと変身して再生したものとす<sup>(3)</sup>る。

萩原氏はヤマトタケルの凶暴さについて、「この凶暴性こそ中央の体制に反逆する在野的心情の発露」とし、クローチエの「實在の英雄は凶暴・苛酷で力と鞭の美德をもった人物である」ということを引用している。また氏は、ヤマトタケルが凶暴な英雄として描き出されたところには、東征譚に見える哀切な敗残の英雄としてのヤマトタケルと対照に描くことによつて、物語の浪漫性を一層高める効果があると言及<sup>(4)</sup>している。

しかし、やはりこのような物語は、いわゆる貴種流離譚における、贖罪を前提とする流離という話型を帯びている。だが、ヤマトタケルの流離譚は結果的に元のところに戻つてくることができな<sup>(5)</sup>い者の話である。貴種流離譚において、流離から試練を乗り越え、最終的に原点に戻つてくる者は権座を掌握するが、戻つてこない者は、大抵、征服の役割を課せられた存在におわつている。つまり、オホウスを殺したヲウスの残虐的な行為は、支配者としての資質を欠いていることを強調するもので、父帝に継いで統治者にはなれない、という強い暗示であろう。そしてその凶暴さは、「服従しない荒ぶる神の征伐」を遂行するための強靱な腕力として生かされるのである。

『古事記』の神代神話を概観すると、支配者となる神の性情に、仁徳と慈愛は欠かせないものであり、横暴であつてはならないという一種の掟が作用していると思われる。例えば、オホクニヌシの兄弟である八十神たちの暴悪な行為や、ホオリノミコトの兄のホデリノミコトの偏狭さは、王者としては失格であり、徹底的に屈服させられる原因として働いている。決して支配者にはなれないという伏線が敷かれていると考えられる。逆に、支配者となるオホクニヌシとホオリノミコトが、各々の兄弟のヤソガミとホデリノミコトを制圧する末尾の描写にも、彼らの本来の性格と対照的に、暴力的な様子は見当たらない。つまり、『古事記』の神話における支配者た

る者の性情として、無慈悲な性格は絶対的に負とされるものである。それに基づいて考えると、神話における荒ぶる神のササノヲと、ヤマトタケルに見られる乱暴な気質は、王者としての威力を表すものではなく、勢力拡張のために他部族を征服したり、あるいは服従しない者を平らげるのに必要な要素として用いられていることがわかる。

さて、前述したように、ヤマトタケルの凶暴性には、兄のオホウスの不敬罪に対する懲罰者としての役目が色濃く反映されている。オホウスは父帝が妃にしようとした姉妹を自分の妻にし、天皇の命令に背くなど、厳罰に処されるだけの重大な罪を犯している。ところが、天皇はこれに対して処罰を行わない。それはおそらく、息子の処断のことで悩む父性愛を表すための作意であり、結局には、兄弟のヲウスがその任に当てられるのである。

是に天皇、三野国造の祖大根王の女、名は兄比売・弟比売の二の嬢子、其の容姿麗美しと聞し看し定めて、其の御子大碓命を遣はして喚し上げたまひき。故、其の遣はさえし大碓命召し上げずて、即ち己自ら其の二の嬢女を婚ひて、更に他し女人を求めて、詐りて其の嬢女と名けて貢上りき。是に天皇、其の他し女なることを知らして、恒に長眼を経しめ、亦婚はずして、惚ませたまひき。故、其の大碓命、兄比売に娶ひて生める子、押黒之兄日子王。(中略) 又倭の屯家を定め、(中略) 天皇、小碓命に詔りたまはく、「何とかも汝の兄は朝夕の大御食に参出来ざる。専ら汝ねぎ教へ覚せ」とのりたまひき。<sup>5)</sup>

引用文にあるように、兄のオホウスは、父帝の景行天皇に、三野国の国造の祖、大根王の美しい二人の娘を宮廷に連れてくることを命じられる。しかし、オホウスは命令に背き、姉妹を自分の妻にし、別の人を求めて天皇に差し上げる重罪を犯すのである。しかも、妻にした二人の姉妹から子供を儲け、朝廷の直轄地とその田を耕作する農民なども勝手に定めてしまう。ところが、父帝は罪を問わず、長い間悩んだあげく、ついにオホウスの弟のヲウスに「ねぎ教へ覚せ」と命令するのである。ここで、「ねぎ教へ覚せ」とは言葉通り、単純に優しく戒めてやりなさいという意味にも解釈できるが、実状、息子とはいえ、天皇の命令に逆らっただけでなく、最高権力者を欺瞞し、権威に挑戦するような、赦されない罪を犯したのである。これに対して景行天皇は息子のオホウス

の処断に悩んだ痕跡が歴然としている。それは、慈愛深い支配者の仁徳を示すためであり、結局ヲウスの乱行は、父に代わって、罪人を罰する者の行為と解することができる。

景行天皇の系譜の末尾に、若帶日子、五百木之入日子命と共に、ヤマトタケルが後継者の資格を有する者として載っている。しかし、これは事実上、景行天皇に継ぐ統治者の系譜からわかるように、史書は人物が亡くなつてから記録されるもので、その真意には摺み兼ねるものがある。長男の櫛角別王に関する言及はなく、『日本書紀』に景行天皇の長男としてオホウスを載せているところから、オホウスに権力が継承される可能性は高かつたと思われる。つまり、そのような肉親関係によつて、父帝はオホウスの放縦に対する処分に頭を抱え、ついには弟のヲウスにその役目を委ねていたのであろう。

しかし、父親の代わりに大罪を犯した兄を乱暴に処断した弟は、その罪の償いに、西国の服従しない人民の征伐に追ひ立てられる身となる。守屋俊彦氏などが「ヲウスがオホウスを殺害した時点で、ヲウスが天皇争奪戦の勝利者になったということになるだろう。」<sup>(6)</sup>と言っているように、ある意味では、兄の死とともに王位を継承するだけの、有力な位置を占めるはずである。だが、記事は、骨肉を殺害したこと、行為の程度が残酷すぎることを極大化し、支配者としての資質に大きな欠陥を負う人物に描き、結局は、派遣という形で本拠を追われる身とするのである。

景行天皇の権座を継ぐ人物は四番目の若帶日子命で、後の成務天皇であり、その次代が仲哀天皇で、これがヤマトタケルの息子に当たる。すなわち、天皇の権威に挑戦した兄のオホウスを処断し、服従しない地方豪族や地方の神を平らげたヤマトタケルの功績は、息子にそっくり譲渡されているのである。

ところで、ヤマトタケルの凶暴性は、クマソタケル兄弟を征伐する場面にもう一度鮮烈に示し出されている。

其の酣なる時に臨みて、懷より劍を出し、熊曾の衣の衿を取りて、劍を其の胸より刺し通したまひし時、其の弟建見畏みて逃げ出でき。乃ち追ひて其の室の椅の本に至り、其の背の皮を取りて、劍を尻より刺し通したまひき。<sup>(7)</sup>（中略）是の事白し訖へつれば、即ち熟瓜の如振り析きて殺したまひき。

新しく築いた建物の落成を祝う宴会が最高潮に達したとき、ヲウスは懷に隠した剣を取り出してクマソ兄弟を残酷に刺し殺すのである。西国征討譚の中心をなすクマソ征伐の話だが、このような無残な殺害の形態は、大和政権の権威に挑んだり抵抗したりする地方豪族や人民に、反抗する者の末路がいかに悲惨なものかを見せしめ、恐怖心と畏敬の念を抱かせるための意図として解釈できる。

征討に立たされたヲウスは、伊勢神宮に寄つて齋宮である叔母の倭姫命から女性の衣服を賜るのだが、これを研究者によつては、アマテラスを祭神とする伊勢神宮の強力な神威を借りたものとする。しかし、実のところ、伊勢神宮と天皇家との関係は雄略天皇のときが初めてで、伊勢神宮の祭神が皇室の神になったのは壬申の乱の後の、天武天皇のときである。しかも、伊勢神宮との関係は東国経略と緊密なつながりができるといふ点で、ヲウスの西征譚の虚構性がいわれている<sup>(8)</sup>。だが、水野祐氏などの指摘が示すように、神武天皇の東国征伐をはじめ、ヤマトタケル伝説などは、壬申の乱における天武天皇や高市皇子の治績をモチーフとして作り上げられたもの<sup>(9)</sup>、という説に重点をおけば、景行条とはいっても伊勢神宮との関連は何ら問題にならない。つまり、書物の編纂者の意図によつて、いわゆる帝記と旧事に虚構が加えられた可能性は高いのである。または、古くから伝わる神話と現在における実話とを融合し、伝説的な人物を作り上げることが多かったと考えられる。ヤマトタケルという英雄もそのような背景から生まれてきたのであろう。

\*

\*

繰り返すが、ヤマトタケルの力は、支配者の権威を象徴するものとして使われるのではなく、大和政権の基盤を固め、支配圏を拡張するために必要な腕力的な力として用いられていることは看過できない。言い換えれば、ヤマトタケルの力は統治者としての権威を表すものではなく、征討者としての武力を意味するということである。ヤマトタケルは、英雄とはいえ、神代神話において英雄として登場する、スサノヲの六代目の孫とされるオホクニヌシや、ホノニニギの三番目の息子のホオリノミコトのように、兄弟によつて虐げられる立場ではなく、逆に、危害を及ぼし、近親を恐怖に陥れる罪人として話のなかに初めて登場してくる。英雄物語とはいえ、話の

パターンが全く異なっていることがわかる。

こう見ると、前述のように、ヲウスが天皇から西国のクマソタケル兄弟の平定を言い渡される様子は、父のイザナキの命令に従わず、災いを齎して追放され、高天原に入ってから乱行を繰り返し、再び追放されるスサノオの話に似ている。スサノオの悪行振りの頂点は、機織場の屋根の上に上つて、穴をあけて斑駒の皮を逆さまに剥いて機織場の中へと落とし、それに驚いた機織女が機に性器を刺されて死ぬ場面である。その罪科でスサノオは再び出雲へ追放されるのである。<sup>⑩</sup> いわゆる貴種流離譚の一形態で、罪に続く流離の形を帯びるものであり、ヲウスの残酷な行為は、雄雄しく荒ぶる神の、スサノヲの乱行に見出される話型である。

上田正昭氏なども言っているように、ヤマトタケルは、流離う英雄とされる神の中から見れば、オホクニヌシよりはスサノヲのタイプに属するものであることは、いうまでもない。<sup>⑪</sup> だが、スサノヲとヤマトタケルの類似性について語る時、普通、スサノヲが高天原で乱行を繰り返し、出雲へと追放される地点の内容を当てるものが多いが、実際、両者の共通点は、イザナキがスサノヲに海原の統治を委任するところから見られるもので、対照の範囲を広げなければならない。

イザナキから海原の統治を命じられたスサノヲが、母のいる根の国へ行きたいと言って、髭が胸元に垂れさがり年ごろになるまで泣き喚いたとあるが、泣くことによって、山の草木が枯れ、川と海が涙に吸い取られてすっかり干してしまうほど、様々な禍をもたらしたとある。それが原因でスサノヲは追放されるが、その真つ先に立ち寄ったところがアマテラスのいる高天原である。そこでまた神やらいされるわけで、この展開はまさにヤマトタケルの西国征討譚に酷似している。スサノヲの話が「泣き喚いて禍をもたらす―父神からの追放―アマテラスのいる高天原訪問―出雲のヤマトノオロチ退治へ」と展開されるように、ヤマトタケルも「粗暴な行為―父帝からの派遣―アマテラスを祀る伊勢神宮訪問―西国の征伐」の、似通った構成を見せている。おそらく、このような『古事記』の構造には、編纂者による、神話や伝説の前提となるモデルともいべき話型が予め用意されていたと考えられる。



また、アマテラスの子孫が葦原中国を統治する前に、乱行を繰り返したスサノヲを地上へと追放し、その追放されたスサノヲによって出雲のヤマタノオロチが征服される話や、また、オホクニヌシの子どもたちが高天原から派遣されたタケミカヅチに屈服し、国譲りがなされ、やがてホノニギが降臨してくるまでの内容からも類似的の構造が見られるのである。もちろん、最終的にはタケミカヅチの派遣によって葦原中国が平定されるのであるが、一次的な征討者としての役割がスサノヲに託されていると思われる。

すなわち、支配に先立って道を開き、開拓する役目がスサノヲやヤマトタケル、二人の主人公に任されているのである。そして、その裏面には、累次に述べてきたように、凶暴な存在として登場させることによって、父帝に継いで権座を占めることができないという揺ぎないメッセージが秘められているのであろう。

日本の神話において、高天原の神々の命令によって征伐の任に充てられた者には、決して支配者にはなれないという決まりがあったようだが、景行天皇によって派遣されるヤマトタケルからも同様の仕組みが見出されるのである。

たとえば、高天原において、アマテラスとタカミムスヒの命令で、オホクニヌシの子孫が支配する葦原中国を平らげるために、三人の征討者が派遣されるが、彼らは選ばれるときから征討者であって、統治者にはなれない運命を背負っている。そのうち二番目に平定にあたったアメノワカヒコは、自分の立場を忘却し、派遣されるやいなやオホクニヌシの娘のシタテルヒメと結婚し、葦原中国をわがものにしようとしたため、謀反と見做されて処刑されるのである。アメノワカヒコは葦原中国を乗っ取るうとした罪で、自分が放った矢に打たれて死ぬ。高天原の天の安河の河原に届いた矢をタカミムスヒが取り、飛んできた方向へと投げ返して、それに中って死ぬのである。いわゆる「返し矢」による処罰であるが、いずれにせよこの話には、統治者と征討者の役目が明確に分けられており、それを犯すものは許されることなく、死を迎えることになるという掟が神話を通して確認されるのである。<sup>12)</sup> 最初に葦原中国の統治を委任されたのは、アマテラスとスサノヲとが天の安河を挟んで行ったウケイ(誓約)の過程で生まれた、第一子のアメノオシホミミである。



ヤマトタケルの話のなかにも支配者にはなれないという暗示が随所に見出される。ヤマトタケルは東国征伐を果たして帰ってくる途中、伊吹山で遭遇した、白い猪に化した山の神を見過ごしたことが原因で、隙を突かれ病にかかり、結局、帰京する寸前の三重の能褒野で死んでしまう。彼は凶暴な性格の故、最高権力者によって征討者として遣わされるが、『古事記』は、最初から支配者たる資格を与えようとしなかったため、難関を乗り越え、任を成し遂げたにもかかわらず、本拠に帰還すらできず、死を迎える数奇な運命の人になるのであろう。

一方で、神代神話の中で、葦原中国を平らげるために、三番目に遣わされたタケミカヅチは、その名からも推測できるように、強靱な力の持ち主で、天の安河の水を逆に塞ぎ上げて道をふさいでいるほどの力強い神として描かれている。しかし、タカミムスヒとアマテラスに平定を下命されると、出雲に降つてオホクニヌシの前に立ち、威風堂々と国を譲ることを要求し、ついにオホクニヌシの二人の息子を屈服させ、オホクニヌシから国を譲られるのである。それから、高天原に戻つて平定の状況を復命する。このように、勇敢で強大な力を有する者でも、権力者からの許可がない限り、支配者にはなれず、ただ、征討者として終わっている。

要するに、クマソ征伐を中心に語られているヤマトタケルの凶暴性は、天皇にはなれないという伏線であると同時に、天皇の権威に逆らう者を征伐する勇者としての強力なイメージなのである。また、歴史的には、大和政権の支配力と中央集権を強化していく過程で起こった、様々な事件を象徴的に記したものと思われる。砂入恒夫氏なども言っているように、西国征伐の話において、ヤマトタケルがヲウスやヤマトオグナなど、別名で呼ばれたりする理由は、「異系の系譜または説話を一本化して一連の系譜や物語に仕立てあげる際に、記の編集者が駆使した常套手段」<sup>③</sup>である可能性は実に高い。つまり、大和政権が中央集権を強化していく中、地方の平定や征服の政策を通して輩出された複数の征伐者や、派遣者などの形象がヤマトタケルに凝縮され、描き出されているということは想像に難くない。

## 二 クマソタケルとイヅモタケル征討の様相

前述したように、ヤマトタケルには美少年的な一面があり、それは女性性ともいえるようなものである。もし、彼の形象が荒くて横暴なところで終わっているとすれば、ヤマトタケルの話が多岐にわたって後代にまで広く伝承され、享受されることはなかったかもしれない。オホウスやクマソタケル兄弟を惨殺した過激な男性性に対照されるヨウスの女性性は、平定において欠かせないものである。ヨウスがクマソタケルに接近するときの様子を記したところに、その外見を表しているが、次のとおりである。

此の時に当りて、其の御髪を額に結ひたまひき。爾に小碓命、其の姨倭比売命の御衣御裳を賜給はり、剣を御懷に納れて行幸でましき。(中略) 故、その傍を遊び行きて、其の樂の日を待ちたまひき。爾に其の樂の日を臨みて、童女の髪カミの如其の結はせる御髪を梳り垂れ、其の姨の御衣御裳を服し、既に童女の姿に成りて、女人の中に交り立ちて、其の室の内に入り坐しき。爾に熊曾建の兄弟二人、其の嬢子を見感ミカでて、己が中に坐せて盛に樂タノシげたり。

ヨウスの年齢についての言及はないが、髪カミの形から、まだ、十五・六歳ほどの少年であつたことが推測できる。すなわち、まだ大人にもなっていない少年が兄のオホウスを残忍に殺し、西国征伐を命じられるという、実に説話性に富んだ内容なのである。しかも、クマソタケル兄弟が築いた敵陣の急所にたった一人で潜入し、宴会を樂しむクマソタケル兄弟の真ん中に座るといった、相当荒唐無稽な展開を見せている。

ここで何より注目に値するところは、ヨウスに女性的な側面が見られるという点である。その女性性は、髪型などからもわかるように、まだ少年の姿を残しているところに確認でき、また、伊勢神宮の斎宮である叔母から渡された女性の衣服で女装をしたというところにも強く見出される。しかも、女装をしたヨウスに、クマソタケル兄弟が魅了されて、自分たちの真ん中に座らせたというところはその極めともいえる。

長谷川正春氏は、物語的解釈として、ヨウスがクマソを征伐する前の、名前と髪型、そして女装から、ヤマト

タケルという呼称を与えられるまでの、西国への旅は、成年戒の表象であり、少年としての死と成人としての再生を意味するものとして<sup>15)</sup>いる。いわば、大人になるための通過儀礼のような性格がクマソタケルの征伐過程に色濃く表れているという主張である。

しかし、ここにも一言では集約できない、多様な素材が溶け合っていることがわかる。物語は実に虚構性の濃厚な説話の形を呈しているが、たとえば、ヨウスが宴会場に入る前に、「遊び行き」という文句が確認される。「遊び行き」という表現には、ただ「ぶらぶら歩く」という意味以上の、濃い象徴性が含まれている。遊女は「あそびめ」または「うかれめ」と呼んだが、当時の遊女は管弦や歌舞の技量のある人たちで、遊びという言葉には、管弦や歌舞をまじえた儀式的な意味が秘められているのである。後ろに続く「女人の中に交り立ちて、其の室の内に入り坐しき」の文中における「女人」は、遊女あるいは巫女を表すものとして理解される。すなわち、ヨウスは遊女もしくは巫女に変装したことになる。つまり、遊びということばは、ヨウスが建物の中に入るために、すでに準備を終えたことを暗示するものである。西宮一民は、童女という文字は巫女的な女性に使われることばであることを指摘しているが、これを念頭において考えれば、ヤマトタケルは建物の落成に関係する儀式に呼ばれた遊女や巫女の中に紛れ込んで、クマソタケルのところに近づいたものと想定できる。したがって、ヤマトビメからもらった女性の衣装には、女性への変装以上の呪術的な意味が内包されているといえよう。

つまり、ヤマトタケルのクマソ平定は、個人の持つ強靱な力とともに、神の加護と靈験が加わったからこそ成し遂げることができたのである。また、神の助けというのは大和政権の先祖であるアマテラスの関与を示すもので、結局、天皇の権力が天によって守られていることを誇示するものでもあろう。結果的にクマソタケル征伐の物語は、大和からきた勇猛で剛健な男子を褒め称えることで話を結んでいるが、大和政権の他部族の征討過程で、戦略的に行われた様々の事件を、ヤマトタケルに象徴される一人に任せて、英雄として祭り上げたものと考えられる。兵士たちの動員が全く見られないところは、神代神話に登場する、流浪の神の性格をヤマトタケルに賦与し、大和政権の優越さとともに、平定の妥当性を刻印させるためであらう。

さて、ヲウスがクマソタケル兄弟を征伐するところを見ると、真つ向勝負ではなく、策略的に相手を騙して隙を突く形をとっている。似たような描写は、クマソタケルを平らげたヤマトタケルが出雲においてイヅモタケルを征伐するところからも見出すことができる。またそれは、神代神話において、スサノヲが出雲に下つてヤマタノオロチを退治する場面と類型である。

ヲウスは、西国で最も勇猛で強力と言われたクマソタケル兄弟を征伐してヤマトタケルとなり、引き続き、山の神と川の神、海峡の神をすべて服従させて、上京の道にのる。その途中、出雲の国に到るが、今度はその国の首長であるイヅモタケルに接近し、肥河で一緒に沐浴をしてから、大刀合わせをするといつて、相手を騙して斬殺する。

出雲は、葦原中国の中では初めて神話の舞台となる地である。タケミカツチによつて平定され、オホクニヌシによる国譲りの話が神代神話に載っているが、ヤマトタケルがイヅモタケルを斬り倒す場面は、高天原で罪を犯して出雲へと追放されたスサノヲの話に似ている。特に、出雲でヤマタノオロチを退治する勇者のスサノヲの話といろんな面で共通している。

即ち出雲国に入り坐して、其の出雲建を殺さむと欲ほして、到ります即ち結友したまひき。故、窃に赤檮以ちて詐の刀を作り、御佩と為て、共に肥河に沐したまひき。爾に倭建命、河より先に上りまして、出雲建の解き置ける横刀を取り佩きて、「刀易為む」と詔りたまひき。故、後に出雲建、河より上りて、倭建命の詐の刀を佩きき。是に倭建命、「いざ刀合はさむ」と詔へて云りたまひき。爾に各其の刀を抜く時、出雲建、詐の刀を得抜かざりき。即ち倭建命、其の刀を抜きて、出雲建を打ち殺したまひき。<sup>17)</sup>

スサノヲが高天原から追放され、地上にはじめて降り立った所は出雲の肥河である。そこでヤマタノオロチを退治するときの方法を見ると、強い酒を醸してそれを飲ませている。ヤマタノオロチが酒に酔つて深い眠りについた隙に剣を抜いて切りかかり、殺してしまう。酒を利用して強い相手を制圧しているのである。スサノヲの話

同様、ヤマトタケルの話にもクマソタケルを征伐するとき酒が用いられていることがわかる。相手が酒に酔った隙を狙うというところに共通点が見受けられる。イツモタケルを制圧するときもヤマトタケルは真つ向勝負ではなく、大刀と木刀をすり替えるといった卑怯ともいえる方法をとっている。このように、スサノヲとヤマトタケル、両者が相手を倒す時の手法には相通ずるものがある。

酒の他に、血に象徴される赤い色彩も共通点として挙げることができる。まず、舞台が両方とも出雲の肥河になつてゐることである。肥河の「肥」は、肥えるという意味だけでなく、「火」を意味するものとしても用いられ、その火は赤い色を表すもので、血や溶岩類、鉄などを象徴したりすることもある。スサノヲのヤマトノオロチの退治の話にはこの赤色が強調されていることが見て取れる。

出雲国の肥の河上、名は鳥髪といふ地に降りましき。(中略)「彼の目は赤かがちの如くして、身一つに八頭・八尾有り。亦其の身に蘿及桧・相生ひ、其の長谿八谷・峽八尾に度りて、其の腹を見れば悉に常に血爛れたり」とまをしき[此に赤かがちと謂ふは今の酸醬なり]。(中略)「汝等は八塩折りの酒を醸み、亦垣を作り廻し、其の垣に八門を作り、門毎に八さずきを結び、其のさずき毎に酒船を置きて、船毎に其の八塩折りの酒を盛りて待て」とのりたまひき。(中略)其の八俣のおろち、信に言ひしが如來つ。乃ち船毎に己が頭を垂れ入れて其の酒を飲みき。是に飲み酔ひて留まり伏し寝ねき。爾に速須佐之男命、其の御佩せる十拳劍を抜きて、其の蛇を切り散りたまひしかば、肥河血に變りて流れき。<sup>18)</sup>

ヤマトノオロチの目は「赤かがち」のようだったと記しているが、赤かがちとは赤いほおずきを意味し、しかもオロチの腹には常に血が爛れていると、クシナダヒメの父の足名椎のことばを通して語っている。また、スサノヲの剣によって斬られた大蛇の血で肥河は赤く染まったとある。このように、出雲を背景とするヤマトノオロチの話は血に象徴され、赤い色が浮き彫りになっていることがわかる。それと同じく、ヤマトタケルのイツモタケル征伐の話も、肥河が背景となつてゐる。ヤマトタケルが出雲の首長のイツモタケルと一緒に、沐浴をするために肥河に入るが、ヤマトタケルが先に河から上がって、予め赤檣で作つておいた木刀をイツモタケルの大刀と

すり替えておく。そして、大刀合わせをしようと促し、木刀さえ抜くことのできないイツモタケルを打ち殺して、出雲を服属させる。スサノヲの話に比するほどではないが、やはり内容に赤色が反映されているのである。沐浴には斎戒沐浴の意味があり、肥河は穢れを祓う神聖な場所としての象徴性を帯びている。結局、イツモタケルは生贄になるために斎戒沐浴をしたことになる。

### 三 『日本書紀』の日本武尊

いままでは、『古事記』のヤマトタケルを軸に、征討者たる性格について考えてきたが、ここでは、『古事記』の内容とは異なる『日本書紀』の日本武尊像に焦点を合わせ、両書の相違について検討してみたい。記紀のそれぞれの特徴に関してはすでに様々な見解が提出されているが、ここでは、特にオホウスとヲウスの関係に注目してみたい。

周知のように、『日本書紀』には、ヲウスが兄のオホウスを乱暴に殺したという内容もなければ、その罪を償うために天皇からクマソ征伐を命じられたとも書かれていない。景行紀には冒頭から天皇自身が直接出征する、いわゆる天皇中心の西国征討の状況が細かく記されている。このような、天皇の強い意志と力によって進められてきた平定の過程で、反乱を起こしたクマソの征討者としてヲウスが選ばれるようになったことが記され、征討に臨む彼の姿勢からは、決然たる覚悟が感じられる。<sup>(19)</sup>

『日本書紀』景行二十七年、ヲウスは征討のために初めて派遣されるが、彼によって征圧されるのは川上梟帥である。また、たった一人で敵陣に潜り込むのではなく、弓の名手らを随行させているところも『古事記』と異なる点である。『日本書紀』によれば、クマソタケルはすでに景行天皇十二年に平定されており、その時ヲウスは派遣されておらず、天皇の遠征が確認できる。いずれにしても、ヲウスの派遣は景行天皇の西国征伐が一段落ついた時点で行われている。この事を通して、『日本書紀』が天皇の治績を優先し、強調する叙述になっている

ことを窺い知ることができる。

また、『日本書紀』は初頭からヲウスにたいする好意的な描写が目立ち、『古事記』に見られる残忍さはどこにも表れていない。景行二年三月の記録を見ると、

是の小碓尊は、亦の名は日本童男。亦是日本武尊と曰す。幼くして雄略しき氣有します。壮に及びて容貌魁偉し。身長一丈、力能く鼎を扛げたまふ。<sup>(20)</sup>

という内容の、ヲウスを称賛する記事が連なっている。しかし、兄のオホウスに関しては、容貌の描写や性格など、人物の紹介さえ見当たらず、『古事記』に見る、彼の不適切な行為についての細かい記録もない。ただ、父帝によって美濃の国に派遣されるが、命令に従わず、三野国の国造の娘たちを自分の妻にしたことが記されており、これに対する天皇の反応が、次のように、簡潔に言及されている。

是の月に、天皇、美濃国造、名は神骨が女、兄の名は兄遠子、弟の名は弟遠子、並に有国色しと聞しめして、則ち大碓命を遣して、其の婦女の容姿を察しめたまふ。時に大碓命、便ち密に通けて復命さず。是に由りて、大碓命を恨みたまふ。<sup>(21)</sup>

重罪にもかかわらず、単に、「恨みたまふ」とだけあり、ほかのことは書かれていない。権力者としての、天皇の私的感情を露わにすることへの躊躇いを感じられる。ところで、オホウスの性格を推し量ることのできる内容が景行四十年の紀事に見える。東国征伐が切実な状況で、天皇が群臣らに向かって、征討者として誰を遣わすか、適任者について意見を聞いているとき、オホウスは弟のヲウスによって推挙される立場にたたされる。

天皇、群卿に詔して曰はく、「今東国安からずして、暴ぶる神多に起る。亦蝦夷悉に叛きて屢人民を略む。誰人を遣してか其の乱を平けむ」とのたまふ。群臣皆誰を遣さむといふことをえ知らず。日本武尊奏して言したまはく、「臣は先に西を征ちしに勞りき。是の役は必ず大碓皇子の事ならむ」とまうしたまふ。時に大碓皇子、愕然ちて、草の中に逃隠れぬ。則ち使者を遣して召し来しむ。爰に天皇責めて曰はく、「汝が欲せざらむを、豈強に遣さむや。何ぞ未だ賊に対はずして、予に懼ること甚しき」とのたまふ。此に因りて、



遂に美濃に封さず。仍りて封地に如る。(中略)是に日本武尊、雄詔して曰したまはく、「熊襲既に平ぎて、未だ幾の年も経ずして、今更東の夷叛けり。何の日に大平ぐるに逮らむ。臣、勞しと雖も、頓に其の乱を平けむ」とまうしたまふ。<sup>(27)</sup>

引用文を見てわかるように、オホウスは人から注目されることがなく、存在感の薄い人物として描かれている。しかも、当時の政府政策の中心を成している「服従しない蝦夷の征討」においても、頭角を現すことがなかった。そのうえ、ヲウスの推挙に身を隠す卑怯な態度を取っている。それは結局、王座を承継する者としての資格を欠いていることを表すものであろう。

\*

\*

さて、『日本書紀』には、事件の起きた年代を記しているが、『古事記』を見合わせて考えると、記紀の間にいくつかの矛盾点が見受けられる。オホウスが美濃国に遣わされた年の景行四年と、ヲウスがクマソ征伐に派遣される二十七年とでは、時間上相当な隔たりがある。それを踏まえて考えると、『古事記』の、オホウスの不敬罪と関連して、ヲウスが兄を殺し、その罪科によってクマソ征伐に発たされるという論理は、妥当性を欠く。

しかも、オホウスが不敬罪を犯したのは、景行四年二月であり、前述したヤマトタケルのクマソ征伐は景行二十七年で、その時、ヲウスの年を十六歳と記しているところからも矛盾が確認される。しかも、オホウスとヲウスが生まれた年が景行二年<sup>(28)</sup>という点を踏まえて考えても大きな隔たりが生じる。双生児の二人が景行二年に生まれたという記録に従えば、オホウスが美濃国に遣わされた年齢が二歳になるため、辻褄が合わない話になり、また、これを基に数えると、ヲウスの熊襲征伐は景行二十七年になるので、当時の年が十六歳というのも矛盾で、ヲウスの年が二十五歳でなければならない。したがって、クマソを騙すために童女に変装したという話にも語弊がある。むしろ『古事記』には、事件が起きた時間を詳細に記録していないため、時間上の矛盾は見出せない。

益田勝実氏は、『古事記』の編者と『日本書紀』の編者との意識の間には、相当大的い格差が存在したことを述べ、八年という編纂時期の差は単純な時間以上の意味が内包しているという。『古事記』の中のヤマトタケル

という悲劇的な運命を背負った男に歴史を担わせる人々の心と、天皇の治績の他には歴史を語れない人々の心が対峙していると言っている。<sup>(24)</sup>一方、上田正昭氏は、『古事記』の倭建命像と、『日本書紀』の日本武尊像の差異について、英雄譚が古代貴族の思想を通路にして変貌していったことであり、大和を象徴する神の知恵と勇猛と愛は民間信仰に密着し、『古事記』の方に濃厚に表れていると言う。そして、各地の有力者で勇者の地方のタケル伝承が大和の神に集中し、最終的に日本武尊像が古代貴族の世界に完成したと主張する。<sup>(25)</sup>

周知のように、ヤマトタケルの悲劇性は『日本書紀』の中では殆ど浮き彫りになっていない。日本武尊は東国征伐を果たし、最終的には大和の地を踏めずに生涯を終えるのであるが、最初から悲劇の主人公だったわけではない。しかし『古事記』のユウスは、自らの願いではなく、天皇の圧力によって西国征伐と東国征伐に赴かなければならなくなる。たとえ、征討の命令を成功的に果たしたとはいえ、自らの意志ではなく、意志に反する派遣だったという点で『日本書紀』と明確な対照を見せている。そのような点から英雄像を考えると、『古事記』よりむしろ、『日本書紀』の方が日本武尊本人の征討にたいする確固たる意志が示されており、勇敢な英雄のイメージを作り出しているといえるかもしれない。

前述したように、神武天皇の東国征伐をはじめ、日本武尊伝説などは、壬申の乱の天武天皇や高市皇子の治績がモチーフになっているとする見解がある。しかし、ヤマトタケル伝説が天武天皇の時の出来事をモチーフとしているとするなら、単に征討に関係した人物に限らないと思われる。天皇によって進められていた、諸国の境界を定める政策のために派遣された人々もモデルになっている可能性が高い。実際、天武十二年十二月十三日には、国境の整理の一環として、伊勢王などを地方視察のために派遣していることが記されている。

諸王五位伊勢王・大錦下羽田公八国・小錦下多臣品治・小錦下中臣連大嶋、并て判官・録史・工匠者等を遣して、天下に巡行きて、諸国の境界を限分<sup>(26)</sup>ふ。

しかも、翌年の冬十月にも伊勢王は諸国の境界を定めるために遣わされている。

伊勢王等を遣して、諸国の堺を定めしむ。

これは、景行紀二十七年冬十月に、熊襲を平定するために派遣される日本武尊の紀事との関連を窺わせるもので、内容を通じて、天武紀の伊勢王らによる境界定めと、景行紀に見られるヤマトタケルの征討記は、何らかの形で結び付いているように思われる。<sup>(27)</sup> 即ち、東征譚を通して、物語が生成される場所の殆どが地方と地方との境界地点であり、それは単に、征討に纏わる事件の伝説化に止まっているとは思えない。天皇の勅命によって行われた、各地方の境界を定めるために派遣された人々からもヤマトタケル像の投影が窺われるのである。

### おわりに

これまで見てきたように、西国征伐に向かう『古事記』のヤマトタケルからは多面的な性格が確認される。それはおそらく、大和朝廷が全国を平定するために遣わした人たちや、国々の境界を定めるために派遣された人々の面影がヤマトタケル一人を通して表出されているからであろう。

その内、ヤマトタケルに見られる凶暴性は、支配者としての権威を象徴するものではなく、大和政権の支配力を強固にし、領域を拡張するために必要な腕力のな力として用いられていることがわかる。神代神話のスサノヲもしくはタケミカヅチ同様、天皇の後継者による完全な支配のために、先立って道を開き、開拓する役割がヤマトタケルに託されているのである。言い換えれば、ここまで凶暴な存在として登場させた理由は、まず、父帝に継いで権座を占めることができないという明確なメッセージを伝えるものであり、また、服従しない地方の荒ぶる神と人民を征討するために付与された強靱な力の持ち主であることを強調するためであろう。

一方、ヤマトタケルの凶暴さは、天皇の命令に背いただけでなく、最高権力者を欺瞞して権威に挑戦するなど、赦されない罪を犯した兄のオホウスを懲罰するために与えられたイメージでもある。しかし、父帝の代わりに重罪を犯した兄を処断した弟はその贖罪の意味で西国と東国の征討に追い立てられるのである。兄の処刑に伴って、王位を継承するだけの有力な位置を占めるようになるはずだが、骨肉を打ち殺した点と、行為の程度を甚だ

残酷に叙述することで、仁徳が求められる権力者としての資質に傷がつき、結局、派遣という形で本拠を追われる身となるのである。そして、天皇の命令に従って、権威に挑んだ兄のオホウスの処断と、服従しない地方豪族や荒ぶる神を平定した功績の報償は息子にそっくり譲渡されるのである。

ヤマトタケルは英雄とされているが、神代神話のオホクニヌシやホオリノミコトが支配者になる反面、彼は東征から無事に帰還できず、三重で亡くなる。そこから、統治者にはなれないという暗黙のメッセージを読み取ることができるのである。

注

- (1) 荻原浅男校注・訳『古事記』上巻「日本古典文学全集」小学館、一九七三、二二二頁。
- (2) 上田正昭・井手室編『古事記』鑑賞日本古典文学 角川書店、一九七八、一八九頁。
- (3) 長谷川正春『境界からの発想―旅の文学・恋の文学―』新典社、一九八九、一三頁。鈴木日出男氏も『王の歌―古代歌謡論―』『倭建の流離物語』の中で似たような見解を示している。(筑摩書房、一九九四、四〇五頁)
- (4) 荻原浅男氏はクローチエの『ヴィコの哲学』の一部を引用している。(『古事記』中巻「日本古典文学全集」頭注、小学館、一九七三、二二三～二四頁。
- (5) 注(1)の二二一～二二二頁。
- (6) 守屋俊彦『ヤマトタケル伝承序説』和泉書院、一九八八、六八～六九頁。氏は、允恭記に見られる軽太子と穴穂御子の兄弟の対立と比較しながら、ヲウスとオホウスも天皇の地位を争っている様子を語ったものと解する。
- (7) 注(1)の二二三～二四頁。
- (8) 藤谷俊雄・直木孝次郎『伊勢神宮』三一書房、一九六〇、一一～五〇頁。
- (9) 水野祐『日本古代王朝史論各説(下)』『水野祐著作集3』早稲田大学出版、一九九三、四七～六二頁。
- (10) 注(1)の六〇頁。
- (11) 上田正昭『日本武尊』日本歴史学会編集、人物叢書、吉川弘文館、一九八六、一二二～一二三頁。
- (12) 関内勲『神話における征討者と統治者の映像』(日本文化学報 韓国日本文化学会、二〇一三、一三三～一三九頁。
- (13) 砂入恒夫『ヤマトタケル伝説の研究』近代文芸社、一九八三、二二頁。
- (14) 注(1)の二二三頁。

- (15) 長谷川正春『境界からの発想―旅の文学・恋の文学―』新典社、一九八九、一二頁。
- (16) 西宮一民校注『古事記』「新潮日本古典集成」新潮社、一九七九、一五九頁。
- (17) 注(1)の二二六頁。
- (18) 注(1)の八六〇八八頁。
- (19) 秋八月に、熊襲亦反きて、辺境を侵すこと止まず。冬十月の丁酉の朔己酉(十三日)に、日本武尊を遣して、熊襲を撃たしむ。時に年十六。是に、日本武尊の曰はく、「吾は善く射む者を得りて、与に行らむと欲ふ。其れ何処にか善く射る者有らむ」とのたまふ。(坂本太郎ほか校注『日本書紀』「日本古典文学大系新装版」岩波書店、一九九四、八四頁)
- (20) 坂本太郎ほか校注『日本書紀』「日本古典文学大系新装版」岩波書店、一九九四、六〇頁。
- (21) 注(20)の六四、六六頁。
- (22) 注(20)の八八、九〇頁。
- (23) 二年の春三月の丙寅の朔し戊辰に、播磨稲日大郎姫(中略)を立てて皇后とす。后、二の男を生れます。第一をば大碓皇子と申す。第二をば小碓尊と申す。(中略)其の大碓皇子・小碓尊は、一日に同じ胞にして双に生れませり。(六〇頁)
- (24) 益田勝実『火山列島の思想』「王と子―古代専制の重み―ちくま学芸文庫、筑摩書房、一九九三、一二九―一三〇頁。
- (25) 上田正昭「遍歴する英雄神」『英雄物語の変貌』(小林行雄ほか編『日本文学の歴史―神と神を祭る者―』所収、角川書店、一九六七、三二九―三三〇頁)
- (26) 坂本太郎ほか校注『日本書紀』(五)「日本古典文学大系新装版」岩波書店、一九九四、四二七頁。
- (27) 関内勲『伊勢物語』東下り章段の生成論』『歌物語の淵源と享受』所収、おうふう、二〇〇二、一一一―一二四頁。